

歴史と文化の息づく中道往還

右左口宿(うばぐち) 上九一色梯(かげはし)
迦葉坂(かしょうざか)の石仏
ガイドマップ

【改定版】



中道往還 右左口宿
歴史文化村推進会

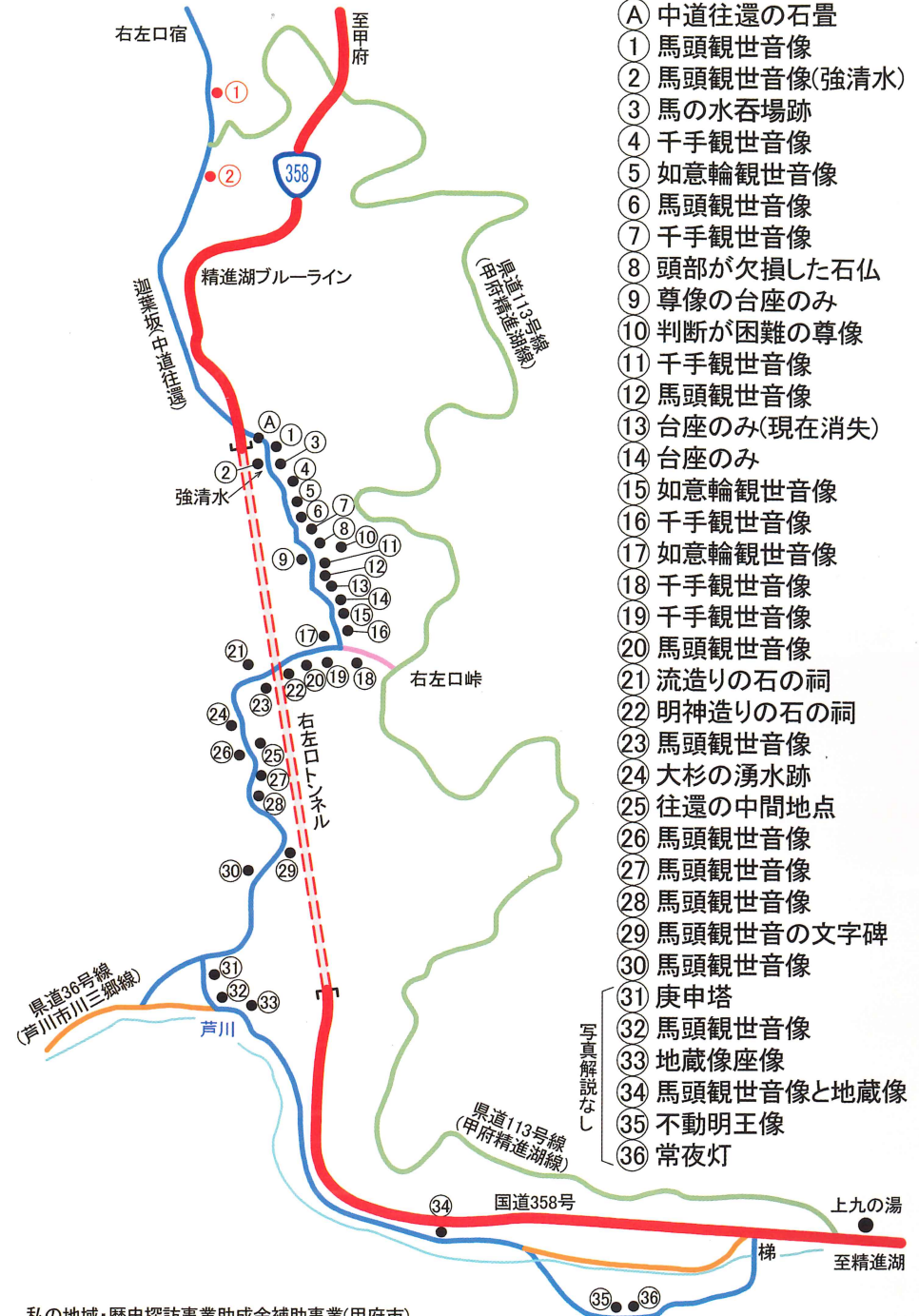
作成
改定日

右左口宿歴史文化村推進会
令和6年3月

解説文 市文化振興指導員 林 陽一朗

- ① 馬頭観世音像
- ② 千手観世音像
- A 中道往還の石畳
- ① 馬頭観世音像
- ② 馬頭観世音像(強清水)
- ③ 馬の水呑場跡
- ④ 千手観世音像
- ⑤ 如意輪観世音像
- ⑥ 馬頭観世音像
- ⑦ 千手観世音像
- ⑧ 頭部が欠損した石仏
- ⑨ 尊像の台座のみ
- ⑩ 判断が困難の尊像
- ⑪ 千手観世音像
- ⑫ 馬頭観世音像
- ⑬ 台座のみ(現在消失)
- ⑭ 台座のみ
- ⑮ 如意輪観世音像
- ⑯ 千手観世音像
- ⑰ 如意輪観世音像
- ⑱ 千手観世音像
- ⑲ 千手観世音像
- ⑳ 馬頭観世音像
- ㉑ 流造りの石の祠
- ㉒ 明神造りの石の祠
- ㉓ 馬頭観世音像
- ㉔ 大杉の湧水跡
- ㉕ 往還の中間地点
- ㉖ 馬頭観世音像
- ㉗ 馬頭観世音像
- ㉘ 馬頭観世音像
- ㉙ 馬頭観世音の文字碑
- ㉚ 馬頭観世音像
- ㉛ 庚申塔
- ㉜ 馬頭観世音像
- ㉝ 地藏像座像
- ㉞ 馬頭観世音像と地藏像
- ㉟ 不動明王像
- ㊱ 常夜灯

写真解説なし



私の地域・歴史探訪事業助成金補助事業(甲府市)
— 迦葉坂(中道往還)徒歩約4時間

概要

内陸地である甲斐と駿河とを結ぶ中道往還は海からの生活物資を運ぶ最短道路として利用され、魚の道・塩の道また富士山信仰の道として多くの人が通行しました。なかでも駿河吉原(現富士市)からの生魚の輸送路として活用されました。馬の背につけられた魚は二十里(約八十キロ)の山道を夜通して中府魚町(現中央二・三丁目)へ運ばれました。そのため人や馬の道中の安全を祈る「馬頭観世音」「如意輪観世音」や「青面金剛」などが人や馬を守り、また「道しるべ」の役として往還各処に祀られています。麓の村で造られて山道を運ばれた石仏は小型ではありますが通る人々に愛され現在に至っています。石に刻まれた個人や村、また講などの名が当時の文化・風習を今に伝えています。

1 馬頭観世音像

旧中道往還に入る手前旧国道113号沿いに鎮座する。無病息災、動物救済厄除旅行安全のご利益があるとされています。

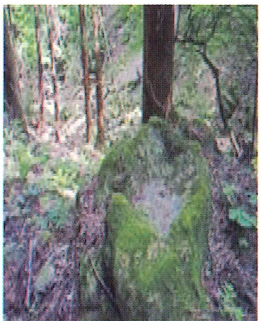


1 馬頭観世音像



国道358号を横切り峠に懸かる道筋に最初に在る。頭上に馬の顔が彫られている。この石仏は舟形、石の上部が欠落している。下部に「心経寺村中」と寄進名がある。心経寺町の旧村名の一つ。

3 馬の水飲み場



荷物を付けて峠を行き交う馬に水を飲ませる水飲み場の跡である。

2 千手観世音像



旧中道往還に入りすぐの所の左側林の中に立っています。千本の手は万物全てを救済しようとする観世音の慈悲の力と広大さをあらわしています。

2 馬頭観世音像



蓮の花の蓮座の上に祀られた像は中道往還の中では、この形態の石仏が多く残っている。旧上九一色の村名「梯村、精進村中」の文字が彫られている。強清水の脇に祀られている。

4 千手観世音像



体に千の手と手のひらに千の眼を備えた千手観世音像、手は簡略化されているが頭部に小さな仏像が付いている、多くの人の悩みを救ったと言われている。

5 如意輪観世音像



膝に肘を付き手先を頬に触れている如意輪観世音像、人々の苦しみを取り去り、利益を与えてくれると云われている。この石仏の舟形部の上部が欠けている。「中畑村中」と彫られている。中畑町の旧村名の一つである。

7 千手観世音像



一見「百足」の足を連想するような手を持つ千手観世音像、地元石工の造りと思われる素朴さが見られる。「山中村中(現在の中央市、豊富と刻まれて居る。



9 尊像の台座のみ

台座のみで尊像は残っていない座の仕上げ丁寧で「広岡面物講中、大津念仏講中、高部(現の中央市、豊富)下芦川中(現在の市川三郷町)講名が刻まれている。

10 判断が困難な尊像



道沿いの大樹の脇に三面八臂(三つの顔に八本の手)が馬頭観世音像の本来の姿である。千手観世音像か、馬頭観世音像か摩耗が激しく判断が困難である。

6 馬頭観世音像



道沿いに岩を集めて一段高くして安置されている馬頭観世音像は、道中目に付くように配慮されている。

8 頭部が欠損した石仏



往還沿いの曲がり角に祀られている石仏頭部が欠損し破損も激しい。谷を落下したのを引き上げて祀られた。

11 千手観世音像



道沿いの大樹の脇に祀られている。一面七臂、右手に錫杖、左に矛を持つ千手観世音像、彫りも深く連座台石も揃っている、肩から下がる天衣の先端の曲がり幕末の特徴がある。「寺尾(現在の笛吹市)邑(村)なか」の表記がある。

12 馬頭観世音像



船形石に三面六臂の馬頭観世音像、摩滅により頭上の馬面の形がはっきりしないが、像の下部に「林蔵、忠晴」の文字が刻まれている。

13 台座のみが在ったが現在消失谷底を捜すも見当たらず。

14 台座のみ



大石の上に台座のみが残る

台座のみ

15 如意輪観世音像



顔に右手を添えた如意輪観世音像、往還沿いでは数少ない丸彫像である。大きな石の上に鎮座し、旅人を見守っている。

16 千手観世音像



岩の上に祀られた千手観世音像、苔で像が覆われている。

17 如意輪観世音像



峠道の分岐点に祀られた礎石、台石に安置されている如意輪観世音坐像は左手に宝珠を持つ。台石に「当村心経寺寺千野平兵衛、甲府一連寺町緑屋太平、為先祖代々、五味伊佐兵衛、関原村石原五左衛門」の彫り込みがある。

18 千手観世音像



蓮台に立っている千手観世音像は往還沿いに祀られた石像と同じ様式を持っているので地方の石工の制作によると思われる。

19 千手観世音像



角度のある舟形石に浮き出された千手観世音像、下部には「当村念仏講中」と刻まれている。

20 馬頭観世音像



全体に彫りが浅いので判断が困難であるが一面一臂、頭上に馬型の無い宝冠をつけた馬頭観世音像、天衣の曲がりが大きく時代の特徴を表している。「古関本村(現代の上九一色)「観音講中」とある。

21 流造りの石の祠



迦葉坂の頂上、山中の西面に祀られている。高さ八十センチ、棟幅四十一センチ、奥行き二十七センチの「流れ造り」の石の祠である。祭神は不詳。

石の祠

22 明神造りの石の祠



迦葉坂の頂上、東側の杉の双樹の前に祀られている。高さ八十センチ、棟幅三十九センチ、奥行き三十センチの「神明造り」の石の祠である。祭神は不詳。

23 馬頭観世音像



峠道の下りに入り上九一色側で最初の石仏、舟形石に丸い光背と石仏の頭上に馬頭がある往還唯一の形式の馬頭観世音像。左に「嘉永三年酉年」右に「七月十八日」下に「馬方中」と刻まれている。

馬

24 大杉の湧水跡



上九一色村から峠にいたる途中にある湧水で、水飲み場として人や馬がここで一休みした。しかし、右左

口側の強清水と同じく水が枯渇して水呑み場の機能はしていない。

25 中道往還 中間地点



かつて中道往還(甲府～駿河吉原間)の中間地点を示す為の目印と云われていたが、計測の結果中間点では無い事が判明した。本栖の中継点から甲府までの中間点?

26 頭部の欠損した馬頭観世音像



前回ガイドマップ作成時には頭部が割れてはいたが上に載せてあった。馬頭観世音像である。像の左に「四年三月二十八日」右に「部國大良」とある。

27 馬頭観世音像



文化村会員による往還清掃時に富永勝智氏により新たに発見された馬頭観世音像である。往還を見下ろすようにカーブの頂点に立っていたと思われる

28 馬頭観世音像



高さ二十センチ幅二十五センチの台石上に祀られている馬頭観世音像、台石に「講中」の文字がある。

馬頭

29 馬頭観世音の文字碑



高さ四十六センチ、幅三十三センチの自然石に「馬頭観世音」と彫られている文字碑である。往還中では数少ない名号塔である。

30 馬頭観世音像



角度のある舟形石に浮き出すように彫られた馬頭観世音像で地元での石工の作と考えられている。

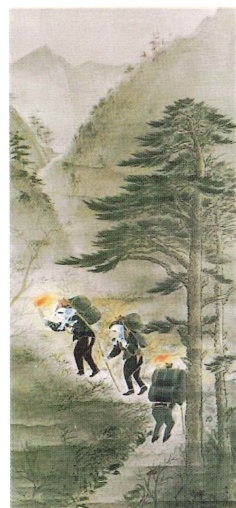


右左口峠と梯の間からの富士山

峠越えで唯一富士山が見える場所
信長も峠の茶室からこの富士を見て
ご満悦だったに違いありません。
夏場は緑で見えなくなってしまう
す。この場所が何処か探して
見ませんか？

炭売り女

上九の男達は山に入って炭を焼いた。女達はカヤを刈ってきて炭俵を編み、露地に運ばれた炭を仕分けて俵に詰めた。一俵の重さは四キロ、それを二俵から三俵、背負子に縛り付けて背負い町に売りに出かけた。「炭はいらんかね」戦後燃料が不足していた時代までよく炭売り女たちを町で見かけた。



ガイドマップ 番外編

中道往還の石畳 ①



宿の集落を過ぎて敬泉寺あたりから中道往還は急峻となり、行き交う旅人や商人には苦難の道であったと考えられます。甲府精進湖線右左口トンネルより15分の所に往還に敷き詰めた石畳があります。土留め、蹄止めとして急峻な場所に作られたと思われます。馬の蹄を痛めないように平たい石を使っています。戦後の燃料が不足していた時代まで上九の炭売りの女性達が背負子で甲府へ通った道。沢からの土砂で1メートル以上埋まっていた所を発見し、文化村の渡辺勝明会員を中心に会員の若手と消防団の有志により手作業にて発掘しました。現在も発掘途中で、発掘した切り土部に石積みを積んだり、土砂除去作業をしています。

強清水 ② 手前



宿の集落と右左口峠のほぼ中間、石畳より5、6分の所に位置する湧水地であり、重き荷物と急なる坂で疲れた身体を癒やす休憩地として、かつては愛用されていましたが、昭和48年、甲府精進湖線（現在の国道358号）として右左口トンネルの掘削により、湧き水は絶えてしまいました。かつては小学校の遠足での休憩場所としても親しまれていました。当時を偲ばせるものとしては、親孝行の息子がここから湧き水を汲んで帰って父親に吞ませた所、旨い酒に代わっていた「親は諸白、子は清水」（諸白は今で言う純米大吟醸酒）という親子愛を語った「強清水伝説」が語り継がれています。

関東から奥羽にかけて、各地に強清水伝説は残っています。旅人や商人が各地の往還を行き来し、語り継いで行ったのでは無いかと遠い昔に想いを馳せ 文化の交流を感じます。

* 右左口宿歴史文化村推進会では年二回の中道往還の清掃整備を行う他、往還の急勾配な坂道に丸太で階段を設置をしたり、倒木の伐採等を行い、来訪者が安全に楽しめるよう取り組んでいます。これからも右左口宿の活性化に資する様々な活動をして参ります。興味ある方、一緒に活動してみませんか。

連絡先：090 - 2540 - 5772 渡辺